

ごあいさつ



日本WHO協会 理事
安田直史

この「目で見えるWHO 2019年夏号」がみなさまのお手元に届くのはG20大阪サミットも終わり、蒸し暑い梅雨の真っ最中であろうかと思えます。2019年は早くも折り返し地点です。

お気づきのことと思いますが、「目で見えるWHO」は先号（2019年春号68巻）から新装改訂いたしました。昨年私とその編集責任者の役を仰せつかり、厚意で集まっていた編集委員の皆さまと一緒に準備をはじめたのですが、みんな保健医療の専門家であり、私を含め雑誌編集の経験者は誰もおりません。プロの編集者やデザイナーさんにアドバイスをもらいながらも、なんとも不安な素人編集団の船出でありました。「どんな記事の構成にするか」、「誰に原稿を依頼するか」、「文字数と写真のバランスは」、「文体はどうするか」・・・。また編集用のソフトに手が出ないおじさんたちを見かねて、大学生がサポートしてくれるようになりました。まさに素人の手探りですが、春号を無事に発行することができ、編集委員一同胸をなでおろしたのも束の間、早くも夏号の準備にかからねばなりませんでした。

新装「目で見えるWHO」では当協会の設立目的に立ち返り、WHOの事業やWHOが発信する有益な情報を多くの方に広く知っていただくことを重視しています。そのためいくつかの新しい試みをご紹介します。まずWHOが英語で発信するニュースの概要を日本語で月毎

にまとめて示しています。既に日本WHO協会のホームページでは和訳を掲載していますが、最新のWHOの動きを日本語で概観できることに對し、既に読者から好意的なコメントをいただいています。次に日本国内に36か所あるWHO協力センター（WHO Collaborating Centre）の紹介コーナーを設けました。またWHOで働く日本人職員の方からご寄稿をいただき、現場の声を届けたいと思っています。そして毎号巻頭には特集としてグローバルヘルスの主要なトピックについての最近の動きをわかりやすくお伝えしますが、SDGsを意識しつつ、さまざまなセクターから見た健康を取り上げたいと考えています。もちろんこれまでどおり、日本WHO協会が主催、後援するイベントやセミナー、勉強会についての報告や、日本WHO協会が人材育成の一環として行う「WHOインターンシップ支援助成」を受けた方々からのWHOインターン体験談もお届けします。

素人編集団ですので、仕上がりには多々ご指摘もあろうかと思いますが、内容に関しては吟味して、質の高いものをお届けしたいと思います。読者からのご批判、ご提案をいただきながら改善を重ね、「楽しく、役に立つ」機関誌に育て上げ、WHOをより身近に感じていただきたいと編集委員一同意気込んでいますので、今後ともご支援を賜りたいと思います。よろしくお願ひします。

2019年6月